

## 2 ビッグベイン病耐病性品種におけるウイルスの検出時期

### ねらいと成果

ビッグベイン病の防除にはまず、耐病性品種の栽培が不可欠である。しかしその発病抑制機作は不明な点が多い。そこで耐病性と罹病性の2つの品種を汚染土に移植し、ウイルスを経時的に検出したところ、耐病性品種では病原ウイルスと思われるミラフィオリレタスウイルス (MiLV) とレタスビッグベインウイルス (LBVV) の検出時期が遅れることが明らかとなった。

### 内容

高濃度汚染土壌に1葉期のレタス (ロジック：耐病性、JT 31：罹病性) を移植し、18℃、高土壌水分条件の人工気象器内で栽培した。移植22, 34, 47, 61, 75日後に病徴観察、および先端から数枚の葉を取り、LBVV は三重抗体エリザ法、MiLV はウェスタンブロット法で検定した。各品種4株を供試

した。

その結果、病徴はJT 31では移植22日後から発現し始め、47日後には全株で発病した。ロジックでは34日後から発現し始め、61日後には全株で発病し、耐病性品種で遅延した。JT 31では、MiLV は移植22日後から検出され始め、34日後には全株から検出された。LBVV は22日後には全株から検出された。一方、ロジックでは、MiLV、LBVVとも34日後から検出され始め、47日後には全株から検出された。

以上のことより、耐病性品種ロジックでは病徴の発現が遅延することには、MiLV、LBVVの増殖遅延が関与すると考えられる。

### 今後の方針

抗体を用いたウイルスの迅速な検出法を利用して、耐病性品種の効率的な選抜が可能かを検討する。

前川和正 (農技センター・病虫害防除部)

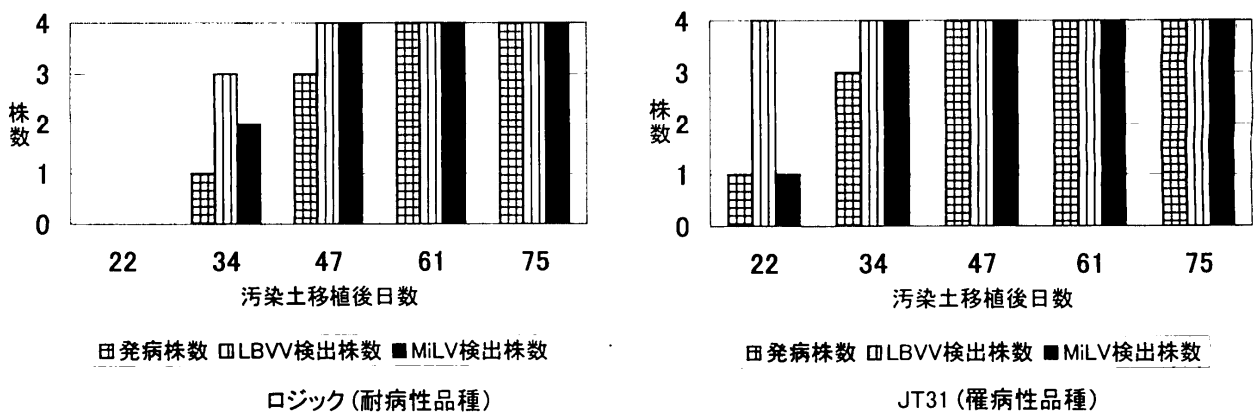


図 品種による病徴発現、LBVV、MiLV検出時期の差異